

日蓮大聖人御書全集

いちのさわのにゆうどうごしよ

一谷入道御書

新版
1758
ゝ
1764

いちのさわのにゆうどうしよ

一谷入道御書

けんじがんねん

がつ

にち

さい

いちのさわのにゆうどう

つま

建治元年('75)

5月8日

54歳

一谷入道の妻

い

こうちようがんねんたいさいかのとりごがつじゅうにち

ごかんき

被

去ぬる弘長元年太歳辛酉五月十二日に御勘氣をこうぼ

いずのくにいとうのこう

るざい

りて伊豆国伊東郷というところに流罪せられたりき。

ひようえのすけよりとも

流

所

兵衛介頼朝のながされてありしところなり。さりしかども、

おな

さんねんたいさいみずのといにがつ

め

かえ

ほどもなく、同じき三年太歳癸亥二月に召し返されぬ。ま

ぶんえいはちねんたいさいかのとひつじくがつじゅうにち

かさ

ごかんき

こうむ

た文永八年太歳辛未九月十二日、重ねて御勘氣を蒙りし

くび

は

しさい

が、たちまちに頸を刎ねらるべきにてありけるが、子細あ

ゆえ

延

ほっこくさど

しま

ちぎよう

りけるかの故にしばらくのびて、北国佐渡の島を知行する

むさしのぜんじあず

うち もの

さた

か しま い

武蔵前司預かつて、その内の者どもの沙汰として彼の島に行

つ

か しま もの

いんが ことわり わきま

き付いてありしが、彼の島の者ども、因果の理をも弁え

荒 夷

荒 当

もう

ぬあらえびすなれば、あらくあたりしことは申すばかりなし。

いちぶん うら ころろ

しかれども、一分も恨むる心なし。

ゆえ にほんこく しゅ すこ どうり し

その故は、日本国の主として少しも道理を知りぬべき

さがみどの くに 助 い もの しさい き 解

相模殿だにも、国をたすけんと云う者を、子細も聞きほどか

りふじん しざい 充 況

ず理不尽に死罪にあてがうことなれば、いおうや、そのすえ

もの 善 頼 悪 憎

の者どものことは、よきもたのまれず、あしきもにくから

ほうもん もう はじ いのち ほけきよう たてまつ な

ず。この法門を申し始めしより、命をば法華経に奉り、名

じつぽうせかい

しよぶつ

じようど

流

おも

もう

をば十方世界の諸仏の浄土にながすべしと思ひ儲けしなり。

こうえん

言

もの

しゆ

えい

いこう

きも

と

わ

はら

弘演といいし者は、主の衛の懿公の肝を取つて、我が腹を

さ

おさ

し

よじよう

もの

しゆ

ちはく

恥

割いて納めて死ににき。予譲といいし者は、主の智伯がはじ

雪

つるぎ

吞

し

をすすがんがために、劍をのみて死せしぞかし。これはた

せけん

おん

報

況

だわずかの世間の恩をほうぜんがためぞかし。いおうや、

むりようこう

このかたろくどう

じんりん

ほとけ

成

無量劫より已来六道に沈淪して仏にならざることは、

ほけきよう

おん

み

惜

いのち

捨

故

法華經の御ために身をおしみ命をすてざるゆえぞかし。さ

きけんぼさつ

もう

ぼさつ

せんにひやくさい

あいだみ

焼

れば、喜見菩薩と申せし菩薩は、千二百歳が間身をやきて

にちがつじようみようとくぶつ

くよう

しちまんにせんさい

あいだ

臂

焼

日月浄明徳仏を供養し、七万二千歳が間ひじをやきて

ほけきよう くよう たてまつ ひと いま やくおうぼさつ ふきよう

法華經を供養し 奉る。その人は今の藥王菩薩ぞかし。不輕

ぼさつ ほけきよう おん たこう あいだ めりきにく じようもくがりやく

菩薩は、法華經の御ために、多劫が間、罵詈毀辱・杖木瓦礫

責 いま しやかぶつ ほとけ 成

にせめられき。今の釈迦仏にあらずや。されば、仏になる

どう とき 品々 変 ぎよう

道は、時によりてしなじなにかわりて行ずべきにや。

いま よ ほけきよう とき

今の世には、法華經はさることにておわすれども、時に

こと 異 習 さんりん 交

よつて事ことなるならいなれば、山林にまじわりて読誦す

さと じゆう えんぜつ じかい ぎよう

とも、はたまた里に住して演説すとも、持戒にて行ずと

ひじ 焼 供養 ほとけ 成

も、臂をやいてくようすとも、仏にはなるべからず。日本

こく ぶつぼうさか ぶつぼう ふしぎ

国は仏法盛んなるようなれども、仏法について不思議あり。

ひと 人これを知らず。譬えは、虫の火に入り、鳥の蛇の口に入る
がごとし。

しんごんし けごんしゅう ほつそう さんろん ぜんしゅう じょうどしゅう りつしゅうとう
真言師・華嚴宗・法相・三論・禪宗・浄土宗・律宗等の

ひとびと われ ほう 得 われ しょうじ 離 思

人々は、我も法をえたり、我も生死をはなれなんとはおもえ

た ほんしとう えきよう こころ 弁

ども、立てはじめし本師等、依經の心をわきまえず、ただ

わ こころ 思 付 きよう 取 立

我が心のおもいつきてありしままにその經をとりたてん

思 果 無 こころ ほけきよう 背 ぶつ

とおもうはかなき心ばかりにて、法華經にそむけば、仏意

かな 知 弘 こくしゆ

に叶わざることをばしらずしてひろめゆくほどに、国主・

ばんみん しん たこく 渡 とし 久

万民これを信じぬ。また他国へわたりぬ、また年もひさし

すえずえ がくしやとう

ほんし

誤

知

くなりぬ。末々の学者等は、本師のあやまりをばしらずし

し

弘

傲

ひとびと

ちしや

思

て、師のごとくひろめならう人々を智者とはおもえり。

みなもと 濁

流

清

み曲

影

源にごりぬれば、ながれきよからず。身まがれば、かげ

直

しんごん

がんそ

ぜんむいとう

既

じごく

お

なおからず。真言の元祖・善無畏等は、すでに地獄に堕ちぬ

かいげ

じごく

のが

もの

べかりしが、あるいは改悔して地獄を脱れたる者もあり、

えきよう

弘

ほけきよう

さんだん

あるいはただ依経ばかりをひろめて法華経の讃歎をもせざ

しょうじ

はな

あくどう

お

ひと

れば、生死は離れねども悪道に堕ちざる人もあり。しかる

すえずえ

もの

し

しよにんいちどう

しん

を、末々の者このことを知らずして、諸人一同に信をなし

たと

やぶ

ふね

の

たいかい

う

さけ

よ

ぬ。譬えば、破れたる船に乗って大海に浮かび、酒に酔え

もの ひ なか ふ
る者の火の中に臥せるがごとし。

にちれん

み ゆえ

ぼだいしん おこ

日蓮、これを見し故に、たちまちに菩提心を發してこの

もう

はじ

せけん

ひとびと

もう

しん

ことを申し始めしなり。世間の人々、いかに申すとも信ず

しざい

るざい

ることはあるべからず、かえりて死罪・流罪となるべしと

いま

にほんこく

ほけきよう

背

はかねて知^しつてありしかども、今の日本国は法華經をそむ

しやかぶつ

捨

故

ごしよう

あ びだいじよう

お

き、釈迦仏をすつるゆえに、後生に阿鼻大城に墮ちんこと

こんじよう

かなら

たいなん

あ

はさておきぬ、今生に必ず大難に値うべし。いわゆる、

たこく

攻

かみいちにん

しもばんみん

いた

いちどう

他国よりせめきたりて、上一人より下万民に至るまで、一同

なげ

たと

せんにな

きようだい

いちにん

おや

ころ

の歎きあるべし。譬えは、千人の兄弟が一人の親を殺した

らんつみに、この罪せんを千わに分けては受くべからず。一々に皆いちいち、

むけんおだいいじよう おな いっごう ふ

無間大城に墮ちて、同じく一劫を経べし。

この国くにも、またまたかくのごとし。娑婆世界しやばせかいは、

ごひやくじんてんごう このかた きようしゆしやくそん ごしりよう だいち

五百塵点劫より已来、教主釈尊の御所領なり。大地・

こくう さんかい そうもく いちぶん たぶつ う いっさいしゆじよう

虚空・山海・草木、一分も他仏の有ならず。また一切衆生

しやくそん みこ たと じようごう はじ いちにち ぼんのうくだ

は釈尊の御子なり。譬えば、成劫の始め、一人の梵王下つ

ろくごう しゆじよう う そうろう ぼんのう いっさいしゆじよう

て六道の衆生をば生んで候ぞかし。梵王の一切衆生の

おや しやかぶつ いっさいしゆじよう おや

親たるがごとく、釈迦仏もまた一切衆生の親なり。また、

くに いっさいしゆじよう きようしゆしやくそん みようし

この国の一切衆生のためには、教主釈尊は明師にておわ

するぞかし。ふ ぼ し おん 父母を知るも師の恩なり。こくびやく わきま 黒白を弁うも

しやくそん おん 釈尊の恩なり。

てんま み い そうろうぜんどう ほうねん もう しかるを、天魔の身に入つて 候 善導・法然などが申す

つ こくど あみだどう つく いちぐん いちごう いっそん に付いて、国土に阿弥陀堂を造り、あるいは一郡・一郷・一村

とう あみだどう つく ひやくせいばんみん いえ 等に阿弥陀堂を造り、あるいは百姓万民の宅ごとに

あみだどう つく いえいえひとびと あみだぶつ か 阿弥陀堂を造り、あるいは宅々人々ごとに阿弥陀仏を書き

つく ひと くちぐち こうしよう とな 造り、あるいは人ごとに、口々に、あるいは高声に唱え、

いちまんべん ろくまんべん とな すこ あるいは一万遍、あるいは六万遍など唱うるに、少しも

ち え もの 勧 たと ひ 枯 智慧ある者はいよいよこれをすすむ。譬えば、火にかれた

る草をくわえ、
水に風を合わせたるに似たり。

くに
ひとびと

この国の人々は、一人もなく教主釈尊の御弟子・御民ぞ

かし。しかるに、阿弥陀等の他仏を一仏もつくらずかかず

念仏も申さずある者は、悪人なれども、釈迦仏を捨て奉る

色はいまだ顕れず。一向に阿弥陀仏を念ずる人々は、既に

釈迦仏を捨て奉る色顕然なり。彼の人々のはかなき念仏

を申す者は悪人にてあるぞかし。父母にもあらず主君・師匠

にてもおわせぬ仏をば、いとおしき妻のようにもてなし、

現に国主・父母・明師たる釈迦仏を捨てて、乳母のごとく

ほけきよう

くち

じゆ

たてまつ

ふこう

もの

なる法華経をば口にも誦し奉らず。これあに不孝の者に

ふこう

ひとびと

いちにん

ににん

ひやくにん

せんにん

あらずや。この不孝の人々、一人・二人・百人・千人なら

いつこく にこく

かみいちにん

しもばんみん

にほん

ず、一国・二国ならず、上一人より下万民にいたるまで、日本

こくみな 挙

いちにん

さんぎやくざい

者

国皆こぞつて一人もなく三逆罪のものなり。

にちがついろ へん

睨

だいち

怒

されば、日月色を変じてこれをにらみ、大地もいかりて

躍 上

だい 彗

星 てん

滔

たいかくに

じゆうまん

おどりあがり、大せいせい天にはびこり、大火国に充満す

ひがごと

思

われ

ねんぶつ

暇

れども、僻事ありともおもわず、「我らは念仏にひまなし。

うえ

ねんぶつどう

つく

あみだぶつ

たも

たてまつ

じさん

その上、念仏堂を造り、阿弥陀仏を持ち奉る」なんと自讃

かしこ

果

無

たと

わか

ふうふ

するなり。これは賢きようにてはかなし。譬えば、若き夫妻

とう おとこ め あい め おとこ 愛

等が、夫は女を愛し、女は夫をいとおしむほどに、父母の

行方 知 ふぼ ころもうす われ 閨 あつ ふぼ

ゆくえをしらず。父母は衣薄けれども、我はねや熱し。父母

じき われ はら あ だいいち ふこう

は食せざれども、我は腹に飽きぬ。これは第一の不孝なれ

かれ とが 知 はは そむ め ちち 逆

ども、彼らは失ともしらず。いわんや、母に背く妻、父にさか

おとこ ぎやくじゅうざい あみだぶつ じゅうまんおく

える夫、逆重罪にあらずや。阿弥陀仏は十万億のあな

あ しゃばせかい いちぶん えん い

たに有つて、この娑婆世界には一分も縁なし。なにと云う

ゆえ うま うし あ いぬ さる 語

とも故もなきなり。馬に牛を合わせ、犬に猿をかたらいた

るがごとし。

にちれんいちにん

ただ日蓮一人ばかり、このことを知りぬ。命を惜しんで

し いのち お

い　こくおん　ほう　うえ　きようしゆしやくそん　おんかたき
云わすば、国恩を報ぜぬ上、教主釈尊の御敵となるべし。

おそ　もう　しぎい
これを恐れずしてありのままに申すならば、死罪となるべ

しぎい　免　るぎい　うたが
し。たとい死罪はまぬかるとも流罪は疑いなかるべしとは

か　し　ぶつおんおも　ゆえ　ひと　憚
兼ねて知つてありしかども、仏恩重きが故に、人をはばから

もう
ず申しぬ。

あん　違　りようど　なが　そうら　なか　ぶんえいくねん
案にたがわず、両度まで流されて候いし中に、文永九年

なつ　ころ　さどのくにいしだのこういちのさわ　ところ　あ　あず
の夏の比、佐渡国石田郷一谷といいし処に有りしに、預か

みようしゆとう　おおやけ　わたくし　ふ　ぼ　かたき
りたる名主等は、公といい私といい、父母の敵より

しゆくせ　かたき　にく　やど　にゆうどう　妻
も宿世の敵よりも悪げにありしに、宿の入道といい、めと

使

はじ

怖

恐

せんぜ

いい、つかうものといい、始めはおじおそれしかども、先世

ないないふびん

おも

こころつ

あず

のことにやありけん、内々不便と思う心付きぬ。預かりよ

じき

すく

っ

でし

おお

りあずかる食は少なし、付ける弟子は多くありしに、わず

はん

にくちみくち

折

敷

わ

かの飯の二口三口ありしを、あるいはおしきに分け、ある

て

い

じき

いえ

あるじ

ないないこころ

そと

いは手に入れて食いしに、宅の主、内々心あつて、外に

恐

うち

ふびん

はおそるるようなれども内には不便げにありしこと、いず

よ

忘

われ

う

ふ

ぼ

とうじ

れの世にかわすれん。我を生んでおわせし父母よりも、当時

だいじ

おも

おん

励

は大事とこそ思いしか。いかなる恩をもはげむべし。まし

やくそく

違

て約束せしことたがうべしや。

にゆうどう

こころ

ごせ

ふか

おも

もの

しかれども、入道の心は後世を深く思つてある者なれ

ひさ

ねんぶつ

もう

積

うえ

あみだぶつ

つく

ば、久しく念仏を申しつもりぬ。その上、阿弥陀堂を造り、

でんぱた

ほとけ

もの

じとう

恐

おも

田畠もその仏の物なり。地頭もまたおそろしななと思つて、

ただ

ほけきよう

かみ

だいいち

どうり

直ちに法華経にはならず。これは、彼の身には第一の道理ぞ

むけんたいじよう

うたが

かし。しかれども、また、無間大城は疑いなし。たとい

ほけきよう

つか

せけん

恐

これより法華経を遣わしたりとも、「世間もおそろしければ、

ねんぶつ 捨

おも

ひみず

あ

念仏すつべからず」なんと思わば、火に水を合わせたるが

ほうぼう

たいすい

ほけきよう

しん

しようか

消

うたが

ごとし。謗法の大水、法華経を信ずる小火をけさんこと疑

にゆうどう

じごく

お

かえ

にちれん

いなるべし。入道、地獄に墮つるならば、還つて日蓮が

とが

失になるべし。いかんがせん、いかんがせんと思ひわづらい

おも

煩

いま

ほけきよう

わた

たてまつ

て、今まで法華經を渡し奉らず。

わた

まい

設

渡し進らせんがためにもうけまいらせてありつる法華經

ほけきよう

かまくら

しょうぼう

と

うしな

まい

そうろうよしもう

をば、鎌倉の焼亡に取り失い参らせて候由申す。かた

にゆうどう

ほけきよう

えん

やくそくもう

わ

がた入道の法華經の縁はなかりけり。約束申しける我が

こころ

ふしぎ

われ

進

かまくら

あま

心も不思議なり。また我とはすすまざりしを、鎌倉の尼の

かえ

ようと

なげ

ゆえ

くにゆうあ

歎

ほんせん

還りの用途に歎きし故に口入有りしことなげかし。本錢に

りぶん

そ

かえ

でし

い

おんやくそくたが

利分を添えて返さんとすれば、また弟子が云わく「御約束違

もう

しんたいきわ

そうら

ひと

おも

い」なんと申す。かたがた進退極まつて候えども、人の思

よう おうわく

ちからおよ

ほけきよう

いちぶ

わん様は狂惑のようなるべし。

力及ばずして法華経を一部

じっかんわた

たてまつ

にゆうどう

祖母

もの

ないないこころ

十卷渡し奉る。入道よりも、うばにてありし者は内々心

寄

よせなりしかば、これを持ち給え。

にちれん

もう

おろ

もの

もう

もち

日蓮が申すことは愚かなる者の申すことなれば用いず。

い

ぶんえいじゆういちねんたいさいきのえいぬじゆうがつ

もうここく

されども、去ぬる文永十一年太歳甲戌十月に蒙古国より

つくし

寄

つしま

もの

固

筑紫によせてありしに、対馬の者かためてありしに

そうのそうまのじように

ひやくしやうとう

おとこ

ころ

宗総馬尉逃げければ、百姓等は男をばあるいは殺し、

いど

おんな

と

あつ

て

あるいは生け取りにし、女をばあるいは取り集めて手を

通

ふね

ゆ

つ

い

ど

いちにん

たす

とおして船に結い付け、あるいは生け取りにす。一人も助か

もの

いき

寄

る者なし。壱岐によせても、またかくのごとし。船おしよせ

ふね押

寄

てありけるには、奉行入道豊前前司は逃げて落ちぬ。

ぶぎようにゆうどうぶぜんのぜんじ

に

お

まつらとう すうひやくにんう

松浦党は数百人打たれ、あるいは生け取りにせられしかば、

いど

よ

うらうら

ひやくしやう

いき

つしま

寄せたりける浦々の百姓ども、壱岐・対馬のごとし。ま

こんど

か

くに

ひやくせんまんおく

つわもの

た今度はいかんがあるらん。彼の国の百千万億の兵、

にほんこく

ひめぐ

よ

な

日本国を引き回らして寄せてあるならば、いかに成るべき

きた

て

さど

しま

つ

じとう

しゆご

しゆゆ

ぞ。北の手は、まず佐渡の島に付いて、地頭・守護をば須臾

う

ころ

ひやくせいとう

きたやま

逃

ころ

に打ち殺し、百姓等は北山へにげんほどに、あるいは殺さ

いど

やま

し

れ、あるいは生け取られ、あるいは山にして死ぬべし。そ

ほど

もそもこれ程のことは、いかんとして起おこるべきぞと推すいす

さき　もう

べし。前に申しつるがごとく、この国の者は一人もなく

さんぎやくざい　もの

ぼんのう　たいしやく　にちがつ　してん　か

三逆罪の者なり。これは梵王・帝釈・日月・四天の、彼の

もうここく　だいおう　み

たま　せ　たも

蒙古国の大王の身に入らせ給いて責め給うなり。

にちれん　おろ

しやかぶつ　おんつか　ほけきよう　ぎようじや

日蓮は愚かなれども、釈迦仏の御使い、法華經の行者な

名乗　そうろう　もち

ふしぎ

りとなのり候を、用いざらんだにも不思議なるべし。そ

とが　くにやぶ

くにぐに　お

の失によつて国破れなんとす。いわんや、あるいは国々を追

ひ　張　ちようちやく

るざい

い、あるいは引きはり、あるいは打擲し、あるいは流罪し、

でし　ころ

しよりよう　と　げん　ふ　ぼ　つか

あるいは弟子を殺し、あるいは所領を取る。現の父母の使

ひとびと良

にちれん

にほんこく

ひとびと

ふぼ

いをかくせん人々よかるべしや。日蓮は日本国の人々の父母

しゆくん

みょうし

そむ

ねんぶつ

ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし。これを背かんことよ。念仏

もう

ひとびと

むけんじごく

お

けつじよう

を申さん人々は、無間地獄に堕ちんこと決定なるべし。た

のもし、たのもし。

もうここく

せ

とき

たも

そもそも蒙古国より責めん時は、いかんがせさせ給うべ

ほけきよう

戴

くび

懸

たま

きたやま

のぼ

き。この法華経をいただき、頸にかけさせ給いて、北山へ登

たも

としごろねんぶつしや

やしな

ねんぶつ

もう

しやかぶつ

らせ給うとも、年比念仏者を養い、念仏を申して、釈迦仏・

ほけきよう

おんかたき

たま

ひさ

法華経の御敵とならせ給いてありしことは久しし。また、

いのち

ほけきよう

うら

たも

もし命ともなるならば、法華経ばし恨みさせ給うなよ。ま

えんまおうぐう

なん

おお

痴

た閻魔王宮にしては何とか仰せあるべき。おこがましきこ

思

とき

にちれん

だんな

おお

ととはおぼすとも、その時は「日蓮が檀那なり」とこそ仰せ

あらんずらめ。

ほけきよう

がくじようぼう

つね

ひら

またこれはさておきぬ。この法華経をば学乗房に常に開

たも

ひと

い

ねんぶつしや

しんごんし

じさい

かさせ給うべし。人いかに云うとも、念仏者・真言師・持斎

ひら

たも

にちれん

でし

なんどにばし開かさせ給うべからず。また日蓮が弟子と

名乗

にちれん

はん

たも

もの

おんもち

なのるとも、日蓮が判を持たざらん者をば御用いあるべか

きようきようきんげん

らず。恐々謹言。

ごがつようか

にちれん

かおう

五月八日

日蓮

花押

いちのさわのにゆうどうのによぼう

一谷入道女房